
平和の距離

紗希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

平和の距離

【Nコード】

N0787B

【作者名】

紗希

【あらすじ】

いつものようなケンカ。でも何か違う。何か大きな違いがあった。そして、東京の二人までも巻き込む。そして、平和の運命は!？

第1話：ケンカの理由（前書き）

初連載です。これから、宜しくお願いしますV

第1話：ケンカの原因

いつものような些細なケンカ。でも今日は少し違った。それも悪い方向に・・・

「平次ィィィ！！早よしーな！置いてくでエ！！！」

「あゝもう！今行くゆーてるやん！」

「いつもそうやん！ホンマに分かつとるん？」

「おー。分かってるで！」

「じゃあ、もう先行くでえ！」

「あ！ちよう待ちーや！！コラ、和葉ア！！」

く
帰り道
く

「あ、そや、平次。うち、お父ちゃんから映画のチケットもろたんよ。一緒にいかへん？」

和葉の胸は、これ以上ないくらいに高鳴っていた。

「は？なんで俺やねん。神山とでもいつてくればいいやんか。」

「紗月はその日忙しいんやって。だから平次誘ったんやけど。あかんかった？」

「特に何にもないんやけど・・・」

「ならええやんか。一緒にいこうや!」

「ああ、分かったわ。しゃーない、いったるか・・・」

「よかったあ! んなら、いついこか?」

「じゃあ、次の日曜なんかどうや?」

和葉は手帳を開き、確かめた。

「うん! 大丈夫やでえ!」

「じゃあ、次の日曜の10..30に
寝屋川駅前に集合な!!」

「分かったわ!」

「すっぱかさしないで、ちゃんと来てや?」

「おう。分かったわ。ちゃんといたる。」

「約束やよ!」

「おう!」

和葉は、胸を躍らせながら家に帰った。

～日曜日～

「おっそいなあ、平次。」

和葉は、多少イラつきながらつぶやいた。

♪チャ～ラララ　ラララー♪

和葉の携帯から、お気に入り之歌がながれた。

「平次からや！」

和葉は電話をとった。

「平次!？」

「おお和葉。すまん、急な依頼が来てしもうていかれへんようになつてしもうた。」

「は・・・?」

「だ・か・ら、依頼があつていかれへんようになつてもうた」

その時、和葉の苛立ちが最高に達した。

「こないだ約束したやんか！絶対行くゆーたやんかあ！
もうええ！平次なんかしらん！」

「おい、オレが行かれへんのは、もう一つ理由が・・・って、和葉
！？和葉ア！？」

ブチッ

ツーツーツー

そう。これが、すべての始まりだった。

第1話：ケンカの理由（後書き）

感想とアドバイスをお願いします＊――＊

第2話：紗月の企み

「和葉ア~~~~!!」

最後に、平次の叫び声が聞こえた。

でも、もう平次なんてしらん。

約束やぶった罰や！

映画、見る気にもなれん。

うちに帰ろうかな・・・。

和葉のヤツ、
オレの話も聞かへんでー！！

オレが行かれへんようになったんはもう一つ理由があるんやー！！

〽昨日〽

「和葉と映画かぁ。そういえば初めてやなぁ。」

平次は内心ドキドキしていた。

「そや！和葉の誕生日近いやん。最近プレゼントあげてないし、いきなりあげて驚かせてみよか！」

そして平次は紗月に相談した。

「なあ、神山。和葉の欲しがってるモン、なんか知らんか？」

「へえ、服部君、なんか和葉に買ってあげるん？」

紗月にはやにやしなから平次に問いかけた。

「なっ・・・！か、和葉の誕生日、近いやん。」

やから、なんか買ったろと思ってなあ！」

紗月は、平次の慌てぶりを見て、さらにからかうように言った。

「そういえば、近所におしゃれなアクセサリーショップできたやろ？
そのブレスレットが欲しいゆーてたわ。」

「アクセサリーショップって・・・あそこかい！
あないな女だらけのところ、一人で行けるかい！」

「なら、うちついてったろかあ？」

「うっ・・・！」

こうして平次は紗月とアクセサリーショップに行く事になった。

（ここで分かった事実・・・紗月は意外と腹黒い！？）

第2話：紗月の企み（後書き）

どうも。紗希です＊へへ＊
投稿遅れてすみません・・・。

第3話：真実（前書き）

どうも＊＾－＾＊

紗月の設定が崩れてますね＾－＾；

そこらへんは、甘く見ておいて下さい！

第3話：真実

「じゃあ明日の放課後でも買いに行かへん？」

「あ、明日やて！？そんな急に・・・しかも映画、明日みるんやで？間に合えへんかったらどないすんねん！！」

「そやけど、ちょっと遅れて行って和葉に渡した方が和葉もよろこぶと思うで？」

「そーかあ？」

平次は疑わしそうに聞いた。

「そーやって！絶対喜ぶわ、和葉。ちよっとしたドッキリってやつやなあ。」

「うゝ・・・分かった。明日、買いにいくでえ！」

「じゃあ明日で決まりやねえ！」

〽翌日〽（和葉との約束の日）

「神山！はよせえ！」

「ち、ちょっと待ってーな。」

「和葉との約束、間に合えへんがな！」

「わかつとるわ。」

「なあなあ、これかわいいんちゃう？」

「あのなあ、今日は和葉のモン買いにきたんやで？」

「ああ。そうやった！」

「で？和葉の欲しいモンってどれやねん。」

「うーんっと、あ、そうこれや！」

紗月はキレイな花をあしらったブレスレットを手にとった。

「これか……。」

平次は、コレをつけた和葉を想像していた。

「あゝ、服部君、和葉のこと妄想してたやろ。」

「なっ……そんなんちゃうわ！」

紗月は平次をからかい、楽しそうにしていた。

紗月が平次をからかい、楽しんでいる時、すでに約束の時間は過ぎていた。

「今何時やろ……って、ええゝ!? 神山、時間過ぎて……。」

「ん？今なんかゆーた？まっ、ええか。さあ次はウチの買い物に付き合ってもらおうで。」

「だから時間・・・」

「んーと、まずコレとこれ、どっちがええと思う？」

紗月は勝手に買い物をし始めてしまった。

（しゃーない・・・。今日の約束は断るか・・・。）

平次は携帯を出し、和葉に電話をした。

「もしもし、オレや。あのなあ、今日・・・」

ちゅーわけやねん！

悪いのは神山や！

（今もまだ買い物してるし・・・。）

そやけど、どうやって和葉に謝ったらええんかなあ。

あーもう、めんどくさいことになってもうた！

ウチは、家に帰る事にした。

今は怒りより悲しみのほうが大きいわ。

いっつも約束やぶってばっかやん。

あかん、泣きそうや・・・。

途中、新しく出来たアクセサリーショップに目が行った。

そこで、信じられん光景を見たんや。

『平次と紗月が、一緒に買い物しとる・・・』

思わずウチは手に持っていたカバンを落としてもうた。

そこで、平次が唾然としているウチに

気づいた。

「和葉!？」 (まずいなあコレ。)

ウチの瞳には、どこから出てくるのか分からんほどの涙が溜まっていた。

そして、気がついたら走り出していた。

どこへ向かうかも決めずに、ただ走り出していた・・・

第3話：真実（後書き）

はあ〜。やっと3話まで行きましたか・・・。

まだ3話・・・いつ完結するのか、自分でもわかりません！どうしましう・・・；

まあ、まだ続きますので、この駄文、読んでやってください!! ^ _

^ ||

第4話：悲しみの中での思いつき（前書き）

こんにちわ＊＾－＾＊

今回は、平次の出番少ないですが、
東京のアノ人が出ます！

第4話：悲しみの中での思いつき

・ ほら、またや。また、ウチが傷付く・・・

ウチはとりあえず、家に向かった。

平次が追いかけてくるのが分かったけど、無視。

「和葉ア！待たんかい！」

平次は、足が速い。

ウチが走り出したとき、100mは距離があった。

でももう平次との差は10mほどに縮まっていた。

ウチは、平次に負けなくらいの持ち前の足の速さで必死に家へと向かった。

平次を振り切り、家に着くとウチはカギを掛けた。

そして部屋に向かった。

「平次のアホー！もう知らん！」

ウチは、思いっきり泣いた。

幸い、お父ちゃんはいない。

誰にも聞こえることの無い、和葉の叫びは、
遠山家に響き渡った。

「そやけど、これからどうすればええんやろ・・・。」

和葉は、つぶやいた。

「そや！蘭ちゃんの所に行かせてもらおう！」

早速和葉は、蘭に電話をしに、1階へ階段を下りていった。

「あ、蘭ちゃん？明日からそっち行きたいんやけど・・・
ええかなあ？」

「明日！？うん。大丈夫よ！新一もいるけど・・・」

「べつにかまへんで！工藤君やったら。
あとね、平次には秘密にしておいてほしいんよ。」

「え！？服部君一緒じゃないの？」

「うん。まあいろいろとあって・・・明日、詳しく話すわ！」

「うん。分かった！じゃあ、東京駅に着いたら電話して！」

「分かったわ！じゃあ、明日ね。おやすみ、蘭ちゃん！」

「おやすみ！和葉ちゃん。」

こうして、和葉の東京行きが決まった。

第4話：悲しみの中での思いつき（後書き）

短い・・・！！

自分でもそう思います。

頻繁には更新できませんが、完結までお付き合いください・・・！！
（最近、おたよりや感想、評価などがめっきり少なく なりました

あ・・・どうか、みなさん私にチカラを

くだサイ・・・！！）

でわ、紗希でした。

第5話：新しい出会い（前書き）

どうも！紗希です＊＾－＾＊

またしても平次の出番が少ないです・・・
でも、新しい人物や、和葉のお父ちゃんが出ます。

（基本的に和葉ラブなので、和葉にいいように
話が進んでいくかも・・・）

第5話：新しい出会い

「和葉く？！起きとるかぁく？」

平次や。

平次とはあれから顔合わせとらん。

どないしよ・・・。

ウチは、無視することにした。

着替えを済ませて1階に下りると、お父ちゃんがいた。

（お父ちゃんには東京行く事言ってもええか。）

「なあ、お父ちゃん。ウチなあ、今日から東京行きたいんや。行ってもええやろ？」

「ああ、ええで。平次君も一緒か？」

「ううん。平次はいないわ。1人や。」

お父ちゃんは少し驚いたが、すぐに答えた。

「そーか。分かった、ええで。行ってきた。」

「でなあ、お父ちゃん、このこと平次にだまっとってほしいねん。」

「ええけど、なんでや？」

「平次なア、ウチとの約束ドタキャンした上に、ほかの子と買い物してんねんで！？」

ありえへんとおもわん！？それに、ここにいると

平次と気まづくなるから、蘭ちゃんのところ行かせてもらうんや。」

「ほーお。うちの和葉にそないなことしたんか。分かったで、和葉。黙っとくわ。」

「ありがと！お父ちゃん！」

「じゃあ行ってくるわ！お父ちゃんも、仕事がんばって！」

「気を付けるんやで！」

「うん！じゃあ行ってきます！」

R
R
R
R
R

間もなく列車が発車します

「わー！ちょっと待ってエ！！」

「ハア・・・間に合ったわ。」

和葉は、自分の席を探し始めた。

「あ、となりいいですか？」

「あ、ええですよ。」

和葉のとなりの人は、同じくらいの年齢の優しそうな人だった。

和葉は、蘭に電話をかけた。

「あ、もしもし蘭ちゃん？今、新幹線乗ったところから。」

「そう。じゃあ、こっち着いたらまた電話してね。」

「分かった！じゃあ後でなあ！」

するととなりの人が話しかけてきた。

「へえ、君って和葉ちゃんって言うんや。
1人でどこ行くん？」

「何？それってナンパしとるん？」

「ちゃうちゃう。かわいいから友達になりたくてなあ。
そうそう、俺の名前は浅川順。よろしくな。」

「ウチは遠山和葉。よろしく！」

「なあ、彼氏いる？」

「え・・・い、いないけど・・・。」

「俺と一緒にや！でさあ、好きな映画とかってある？」

「ウチは、ハリーポッターとか好きや。」

「それ、俺も好き！なんか俺たち相性ええみたいやね！」

「そやね！」

こうして和葉は順と楽しい時間を過ごした。

第5話：新しい出会い（後書き）

やっと投稿できました・・・

忙しいんですよ。学生は。。。

でもがんばっていくのでこれからも読んでくださいね！

あと、感想・評価のほうもよろしくおねがいします☆

第6話：到着

あれから和葉と順は東京に着くまで、ずっとお互いのことを話し続けた。

チャラララー

当列車はあと10分ほどで終点・東京に到着します

到着を伝える放送が車内に響いた。
アナウンス

「順くん、そろそろお別れやね・・・。
そや！メルアド交換せえへん？」

「ええよ。和葉ちゃんとメル友か。ええな〜!!」

順は、あからさまに喜んでいた。

（順くんって、純粹でかわええなあ。

平次とは大違いや。）

微笑んでいる和葉に、順は話しかけた。

「なあなあ、和葉ちゃん。さっき言っとった『平次』って、誰？」

「ああ、幼馴染や。順くんも知ってると思うけど。

西の高校生探偵、服部平次。」

「知ってるで！こないだテレビ出てたヤツやろ！

すごいなあ、和葉ちゃん。そんなヤツと幼馴染なんて・・・。」

「そーやよ。」

平次のことを話していると、順が突然話題を変えた。

「なあ、和葉ちゃん。さっきから気になっとったんやけど、

東京に1人で何しにいくん？」

「まあ、色々あったんや。」

「そうかあ。あとなあ、どこにいくん？」

「米花町や。友達がいんねや。」

「そーなん！？俺は烏矢町やから、近いやん！
そや！今度遊び行ってもええ？」

「ええよ。後で友達に聞いてみるわ。聞いたら、
メールするわ！」

そんな会話を交わしている間に、到着時刻は
刻々と近づいていた。

チャララー

まもなく終点、東京に到着します

別れを告げる放送が流れた。
アナウンス

列車がホームに着くと、人々がいつせいにホームに流れ込んだ。

「順くん、お別れやね。電話したらまたメールするから。」

「まತ್ತるわ。じゃあなあ、和葉ちゃん。」

和葉と順は、それぞれの目的地へ向かった。

和葉は蘭に電話をした。

「あ、蘭ちゃん？今着いたで！うん。改札んところでまತ್ತるから。
あとなあ、友達が蘭ちゃんのとこ行きたいゆうてるんやけど、今
度行ってもええ？」

「え？和葉ちゃんのお友達？いいよ！待ってるから、いつでも来て
！」

「ありがとう、蘭ちゃん！」

和葉は、電話を切った。

そして、待ち合わせ場所へと向かった。

第6話：到着（後書き）

こんにちわ＊＾－＾＊

私のP C、なぜか顔文字が出なくなっていました

（T－T）

さて、小説のほうですが、いかがでしょうか？

次は、平次が和葉がいらないことに気付きます。

何か、ご意見・感想があれば、評価と共に

お願いします！

では、紗希でした。。。

第7話：再会（前書き）

更新がかなり遅れてしまいました・・・
すみません！

第7話：再会

「あっ、蘭ちゃん！こっちやでー！！」

和葉は手を振りながら叫んだ。

「和葉ちゃん、久しぶり！」

二人は、お互いに会えたことを喜んだ。

「じゃあ、和葉ちゃん。タクシー乗ろう！」

蘭は、タクシーに向かって歩き出した。

「蘭ちゃん！ええよ。歩こう？」

「いいのいいの。うちのそばにバス停ないし、歩くとちよっと遠いから。」

「うん・・・」

蘭の柔らかな微笑みには、和葉は勝てなかった。

「毛利探偵事務所までお願いします」

蘭は、乗りなれたように言った。

「ねえ、和葉ちゃん。さっき言ってた友達って誰？」

「新幹線で知り合うたんや。順くんって言ってなあ、めっちゃ

ええ子なんやで！年もうちらと同じやし。」

和葉は嬉しそうに話した。

「でも順くん、いつ来るんだろうね？」

「そやった！いつ来るか、聞いとらんかった！メールして聞いてみるわ！」

和葉は携帯を開くと、メールをうち始めた。

しばらくすると、返事が返ってきた。

『そうやなあ、明日なんてどう？良かったらでええんやけど。』

和葉は蘭に話しかけた。

「なあ蘭ちゃん。順くん、明日来たいゆうーてるんやけどええかな？」

「うん！いいよ。」

「ありがとな、蘭ちゃん。」

和葉は、またメールをうち出した。

「お客さん、着きましたよ。」

運転手が言った。

蘭は代金を払うと、和葉を家へ案内してくれた。

家に入ると、蘭が紅茶を入れてくれた。

蘭が、母親からもらった物らしい。

ソファーに腰掛けると、メールの着信音が鳴った。
順からだ。

『じゃあ、明日10時に行かせてもらおうわ。』
それだけだが書かれていた。

「蘭ちゃん、順くん明日10時に来るって！」

「うん。分かった！」

しばらくすると、蘭が話しかけてきた。

「ねえ、和葉ちゃん。服部君となんかあったの？」

一人でこっち来るのなんて、珍しいから・・・」

蘭が心配顔で、和葉の顔を見つめた。

「それがなあ・・・」

和葉は事情を話した。

「え!?! 服部君がそんな事を?」

蘭は驚いていた。

「そうなんよ……。ウチも信じられなかったもん。」

それで、家を飛び出してきたんよ……。」

和葉は肩を落として話した。その瞳には、薄っすらと涙が浮かんでいた。

「きっと何かの間違いだよ! 服部君がそんな事するはずないよ!」

「ありがとう、蘭ちゃん。そやったらいいんやけどね……。」

和葉は、悲しそうな笑みを浮かべた。

「なあ蘭ちゃん。平次には、この事言わんというて欲しいねん。」

今は、そつとしておいてほしいから……。」

「うん。分かった。」

蘭は、和葉の勘違いであればいいと、心から思った。

「あーもう! こんな話やめた! そや! 蘭ちゃん。今日は蘭ちゃんの部屋
に泊まるんでええの?」

和葉は、今日の事に変えた。

「あのね、そのことなんだけど、うちじゃ狭いから新一の家に泊まろうと思ってるんだけど

いいかなあ?」

「ええけど……。迷惑とちゃう?」

新一の家には今まで何回か行った事はあるが、泊まった事はない。そんな自分がいきなり泊まりに行ったら、迷惑ではないか?

そんな事を思っていた。

「大丈夫だよ! 私も一緒だし。」

蘭は相変わらずの笑顔で答えた。

そして二人は、工藤邸に向かう事となった。

第7話：再会（後書き）

どうも！紗希です☆

更新が滞っていた間も感想・評価をくれた皆さん！
本当に有難うございました！
これからも頑張ります☆

第8話：工藤邸で（前書き）

またまた投稿が遅れまして、すみません；
気まぐれな作者なもんで・・・；；；
今回は新一の登場です！

第8話…工藤邸で

工藤邸につくと蘭はポケットから鍵を取り出した。

「蘭ちゃん、工藤君の家の鍵持っとなの!？」
和葉は驚いた。

「うん。新一ったら、本読み始めると掃除も食事もしないから・・・その上、読み終わった本は散らかしっぱなし。だから私が片付けしてるの。全く、しょうがないでしょ？」

蘭は楽しそうに笑った。

「そうなんやあ。そら工藤君、幸せやろなあ」
和葉はからかうように言った。

「もう、和葉ちゃんったら・・・」
蘭は照れ笑いをした。

そして蘭はドアの鍵を開け、
「和葉ちゃん、いこ!」
と、ウチを促した。

工藤邸の広い広いリビングには、新一の姿は無かった。

「もう、新一ったらまた本読んでるのかなあ。
今日は和葉ちゃん来るよって言ったのに。」

蘭は腰に手を当てて、ぷうっと頬を膨らませた。
「新一いゝ? いるのゝ?」

蘭は2階に声をかけながら階段を上っていった。

ウチは傍にあつたソファ―に腰掛けた。

暫くすると、蘭と新一が軽い口喧嘩をしながら階段を下りてきた。

「ごめんね、和葉ちゃん。なかなか新一が来てくれなくて……」
そういう蘭のとなりには蘭に本を奪われ、見るからに不機嫌そうな新一がいた。

「く、工藤君、久しぶりやなあ。」

私は何気なく話しかけてみた。

「ああ、いらっしやい。」

久しぶり、和葉ちゃん。」

新一から、眠そうな声の返事が返ってきた。

「新一！せっかく久しぶりに会ったのに

和葉ちゃんに失礼でしょ！」

蘭に怒られ、新一は観念したのか

「着替えてくる」

と言って再び2階に戻っていった。

「ごめんね、ホントにちっちゃいことで

すぐに拗ねるんだから……」

蘭は呆れたように言った。

「ええよ。でもいつつもああなん？工藤君」

「そうなの。困っちゃうわよね……」

そんな事を喋っていると、2階から新一が下りてきた。

さっきとは、かなり違う。

（声には出されへんけど、

かなりカッコイイ……）

新一はリビングのソファ―に座るなり、

「で、和葉ちゃん。今回はどうして東京こっちに

来たの？服部なしで。」と聞いてきた。

ウチは、いきなり核心に迫った質問に少し驚いた。

「うん。実はこんな事があって・・・」

ウチは今までの事をすべて工藤君に話した。

「なるほどね・・・で、こっちに来る事を
服部には？」

「言っておいてほしかったから・・・」

ウチはありのままの気持ちを話した。

「そっか。じゃあ服部には言わないほうがいいな。」

「うん。お願いするわ」

工藤君の心遣いが嬉しかった。

「じゃあ蘭、後はよろしくな。ごゆっくり、和葉ちゃん。」

部屋は、2階の部屋を使っていいから。後はよろしくな、蘭。」

そうやって工藤君は2階に戻っていった。（きっと本を読むんだろう）

「じゃあ和葉ちゃん、荷物片付けて部屋にいこ！」

「うん！」

二人は、2階へと階段を上っていった。

第8話：工藤邸で（後書き）

どうも、紗希です。

今回はいつもよりは長めに仕上げました。

想像力・文章力が無いものですから、コレだけを書くのに結構な時間がかかりました・・・（汗）

話題は変わりますが、近頃荒らしの様な評価をする読者さんがいらっしゃるようです。

私はまだ被害を受けてはいませんが、評価に苦しんでいる作者もいます。もし、これを読んでいる方でそのような評価をした事のある方がいましたら、二度と

そのような事はしないでください。

もしも私の作品に荒らしの様な評価・感想などや根拠の無い悪評価などが

あれば即、削除させていただきます。

決して悪い評価・感想は受け付けません、というわけではありません。その評価・感想をみて不快に思われる方がいらっしゃるかもしれませんので、削除させて頂きます。ご了承下さい。

尚、アドバイスなどは大歓迎です。

第9話：和葉の行方

それから和葉と蘭は2階にある客室へ向かった。
その部屋はベッドもある、比較的広い部屋だった。

「和葉ちゃん、この部屋使っていいから。私は、
この隣の部屋を使うね！じゃ、荷物片付けよっか！」

そういつて蘭は腕まくりをした。

「うん！ありがとう！」

そういつて二人は片づけを始めた。

和葉~~~~~！！

どこいったんじゃ~~~~！！！！

あれから家に鍵かけよって、しゃーないからそんなときは
家に帰ったんやけど・・・

次の日に和葉んちいつてみたらいないやん！

携帯も繋がらへんし・・・

そや！神山に聞いてみたら何か分かるかもしれん。

平次は紗月に電話をかけた。

「服部君？何やねん。」

「おお、神山か？なあ、和葉知らんか？」

平次は単刀直入に聞いた。

「はあ？和葉あ？何でそんなこと聞くんや。」

紗月は呆れたように言った。

「和葉がいなくなったんや！神山だったら何か知ってるんとかやうかなあと思て。」

平次が言った瞬間、紗月は驚きの声を上げた。

「はあ！？和葉がいなくなったやて！？」

「だからそう言ってるやないか！」

平次はいらついた様に言った。

「服部君、思い当たる事ないん？」

紗月は平次に尋ねた。

「昨日、和葉とケンカしたんや・・・」

平次は少し落ち込み気味に言った。

「なら、服部君が悪いんやん。」

紗月が平次を責めると、平次が反発した。

「お前も悪いんじゃ！昨日お前と買い物しとるとこ

和葉に見られたんじゃ！お前がいつまでも買い物しとるからじゃ
！」

平次が言うと、紗月は慌てた。

「ええ！？あれ、和葉に見られてたんか・・・

なら、勘違いしてしもてるかも・・・。」

「そや！で、お前なんか知らんか？」

「ごめん。何にも知らんわ・・・

でも和葉、よく東京の友達と話してたからそこかも・・・」

紗月はそう答えた。

「分かった！ありがとな。神山。」

平次はでんわを切ると、東京のあいつのところへ電話をかけた。

第9話：和葉の行方（後書き）

どうも、紗希です！

またしても更新遅れました。すみません（汗）

今回は久々の平次の登場となりました。

次回は平次と新一が登場する予定です！

第10話：それぞれの作戦（前書き）

かなり久しぶりの更新です；
お待たせしましたv

第10話..それぞれの作戦

「おお、工藤か！」

「俺の携帯に掛けといて、他に誰が出るんだよ。」

新一は不機嫌そうに答えた。

「スマンスマン。んでやなあ・・・」

「んで、何なんだよ。」

勝手に話し始めた平次に、新一は苛立っていた。

「あんなあ、和葉がいなくなったんや。」

工藤、何か知らんか？」

「知らないぜ。」

新一は和葉に言われた事を守り、知らないふりをした。

「そうか。なあ、そこに姉ちゃんいるか？」

「ああ、いるけど・・・」

平次の質問に疑問を持った。

「なら、かわってくれへんか？」

「ああ、別にいいけど・・・」

新一は2階から蘭を呼び、電話に出させた。

そう、平次には作戦があった。

「もしもし、服部君？私に何か用？」

蘭は不思議そうに尋ねた。

「姉ちゃんなあ、和葉がどこ行ったか知らんか？」

平次は真剣に聞いた。

平次の作戦はこうだった。

《工藤ではなく、姉ちゃんに聞いてみよう》
というものだった。

というのは、新一に聞いてもあっさりかわされてしまうだろうから、嘘がつけなさそうな蘭に聞いて、見極めようということだ。

「え・・・！？し、知らないよ？」

案の定、蘭は慌てている様子だった。

「そうか。ありがとな、姉ちゃん。」

そういつて平次は電話を切った。

（よし！やっぱりそうや！和葉は東京にいる！）

平次はそう確信した。

そして、東京に向かう準備を始めた。

「蘭、服部なんだって？」

新一は蘭に言った。

「どうしよう・・・服部君にばれちゃったかも・・・」
蘭は泣き目だった。

（そうか・・・服部のヤツ・・・）

蘭に代わらせたのはそのためか！）

平次の作戦に気付いた新一は、らんと言った。

「蘭。服部、もうじき東京（こっち）にくるぞ。」

「やっぱり・・・どうしよう・・・和葉ちゃんに言った方がいいかな・・・」

蘭は慌てていた。

（そうだ！）

「なあ、蘭。和葉ちゃんには悪いけど・・・」

新一は蘭に耳打ちした。

「うん・・・約束はやぶる事になるけど、その方がいいかも。」

「だろ？いつまでもここにいる訳にもいかないだろうから・・・」
名案だろ？と新一が言った。

「うん。そうしょ！」

そして、それぞれ皆が動き出した。

第10話：それぞれの作戦（後書き）

こんにちは、紗希ですV

最近忙しくて更新してませんでした・・・すみません

（＋□＋）

もう四月ですねV進級、進学される方も多いでしょう。
そしていつも思うのですが、コナンの世界では

新一がいなくなってから半年でしたっけ？

青山先生が言ってた通り、サザエさんの世界ですね；

それってあれだけ色々な事件が起こっていても

半年しかたってないなんて（笑）

映画も11作もやってるのに・・・

謎が多いですよね；

では！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0787b/>

平和の距離

2010年10月9日22時14分発行